

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第902号 平成27年3月24日

## 蘇る悪夢「地下鉄サリン事件」(2)

「地下鉄サリン事件」については、発生してから20年という期間が経過するのに、今もって、オウム真理教が何故あのような事件を起こしたのか良く分かっていません。

事件そのものは、林郁夫の自供をきっかけに全容はほぼ明らかとなっています。麻原彰晃初め事件に関与した幹部クラスの信者も逮捕され、2011年11月には「地下鉄サリン事件」等オウム真理教関連事件で起訴された200人近い信者に関する全ての裁判は終結しています。これによって、「人生をもう一度生き直そう」と考えた被害者も少なくなかった事と思いますが、今年に入り、古傷をえぐり出すような裁判が始まりました。

この裁判は、「地下鉄サリン事件」に関与したとして全国に特別指名手配され、2012年（平成24年）6月に逃亡先で逮捕された高橋克也に関するもので、今年の1月16日に東京地方裁判所で初公判が行われ、今も裁判は続いています。

その初公判の中で、高橋被告から全く謝罪の言葉がなかった事に、被害者には大きな戸惑いが広がっています。高橋被告には、罪の意識はないのでしょうか。それとも、そうした振り返りも出来ない程に、彼の人格は破壊されているのでしょうか。更にいえば、高橋被告は未だにマインドコントロールの呪縛から解放されていないのかも知れません。

2月18日に開かれた裁判の中で、証人として出廷した新実智光被告は、「地下鉄サリン事件」に関して、それは「今も魂の救済の一環と確信している。神の視点から見ても救済だと思う」と述べています（2月19日付北海道新聞から）。その発言は、自己防衛のためなのか、それとも、本当にそう信じているのか分かりませんが、被害者を前にして、平然と殺人を救済と言い切る精神に、彼の人間破壊を見る思いがしますし、マインドコントロールの力や恐ろしさを見せつけられたように感じています。

「オウム真理教」は既に解散していますが、新たな宗教団体として「アレフ」や「ひかりの輪」が「オウム真理教」の意義や信者の一部を引き継いで活動しています。しかも、こうしたカルト教団には今も若者達の入信が続いている事にいい知れぬ不安を感じます。

「アレフ」や「ひかりの輪」に入信している若者達は、これらのカルト教団が20年前に「地下鉄サリン事件」を引き起こした「オウム真理教」を母体としている

事をどこまで認識しているのでしょうか。

多くの若者達は、20年前の事件は過去のもので、自分達には関係ないと思い込んでいるのかも知れませんが、もしかしたら「オウム真理教」は正当だと信じている、あるいは、信じ込まされている可能性も有ります。

カルト教団の活動の実態が良く見えないだけに、日本の将来に非常な不安を感じている人は少なくない事でしょう。

オウム真理教には「ヴァジラヤーナ」という「救済のためなら殺人も許される」という教えがあるそうです。若者達が、どうしてこんな手前勝手な理屈で武装し、無差別殺人に手を染めていったのか、そして、今もなお若者達がカルト教団に惹かれていくのはどうしてなのか、更には、新実被告のようにその呪縛から今なお解放されずにいるのは何故なのか、解明しなければならぬ課題の大きさにたじろぐ思いがします。

「地下鉄サリン事件」の被害者には、今もなお後遺症で苦しんでいる人が少なくありません。この20年間は、被害者にとっては忘れようとしても忘れられない、重く、苦しい年月であったと思います。それが今、高橋被告の裁判で蒸し返されてしまう苦しみは、私の想像を超えていると思っています。

被害者にとって、失われた家族、失われた時間を取り戻す事は出来ませんが、高橋被告には、この裁判が真相解明の最後の場である事を深く認識し、せめて誠実に事件の全容を明らかにして欲しいと思いますし、彼にはそうする以外に救われる道はないのだという事を、強く申し上げておきたいと思います。(塾頭：吉田 洋一)